

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成 27 年 10 月 1 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 東南アジア研究所

職名・学年 連携研究員

氏名 紺屋 あかり

助成の種類	平成26年度・若手研究者在外研究支援・在外研究長期助成		
研究課題名	現代パラオ社会における唱歌のもつ社会的・政治的意味:うたの実践と継承を通じて再編される社会関係		
受入機関	オタゴ大学 Otago University, Te Tumu, School of Maori, Pacific, and Indigenous Studie		
渡航期間	平成27年3月31日 ～ 平成27年9月30日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	1,100,000円	
	期間短縮による再決定助成額	1,000,000円	
	返納すべき助成金額	100,000円	
	助成金の使途内訳	渡航費用(航空賃) 35万円	
		ニュージーランド国内移動費(航空賃)3万円	
		ニュージーランド国内移動費(バス賃)3万円	
航空使用料・燃油サーチャージ出国税4万円			
滞在費(日当・宿泊料)65万円			
当財団の助成について	不測の事態が生じやすい海外派遣において御財団による自由な助成制度は、助成を受ける側にとって非常にありがたく、研究遂行しやすい環境でありました。そうしたこの度の助成に伴う派遣によって、ニュージーランドにおける太平洋地域研究者らとの研究ネットワークを構築することができたことをご報告するとともに、このような機会を与えて下さった事に心より感謝申し上げます。ミクロネシア研究が今世界的に少ない中、報告者の研究による成果が少しでも今後の当該地域研究に貢献しうよう、今回の経験を活かして今後も研究に邁進したいと存じます。		

平成 27 年 10 月 1 日

26 年度在外研究長期派遣に係る成果報告書

東南アジア研究所 連携研究員 紺屋あかり

(採択時の所属：アジア・アフリカ地域研究研究科 博士課程)

本派遣の主な目的は、1) オセアニア研究の世界的拠点における海外研究基盤の構築、2) 報告者の博士論文に係る研究成果のアウトプット、3) ミクロネシアの詠唱/踊り及びナラティブ・アートに係る文献調査の 3 点であった。その結果、次のような成果を得ることができた。

1) 報告者が所属していたオタゴ大学 Te Tumu, School of Maori, Pacific, and Indigenous Studie にはおよそ 30 名の太平洋地域研究者が在籍しており、定例セミナーへの参加及び研究室での日常的コミュニケーションを通じて学術的交流を行った。また、カンタベリー大学やオークランド大学に所属する太平洋研究者らとも研究会などを通じて学術的交流を試みた。報告者が中心とするミクロネシア研究者はニュージーランド国内においては非常に少数であったが、所属先のポリネシア地域研究者（人類学、言語学、天文学、メディア学など）らとの意見・情報交換の機会に恵まれた。なかでも上記研究者らとは、伝統的知識及び母語の使用によって再構築される創造的なアイデンティティの形成過程という現代的課題及び、大航海時代以前より長らく続いてきた太平洋地域間における文化的交流の軌跡といった包括的な歴史観に関する議論を重ねることで、新しい知見を得る事ができた。これら派遣中に経験した度重なる議論及びそれに伴い培った人脈によって、今後の共同研究の可能性も十分に開かれたといえる。特に、パラオを対象とする口承文化を専門として長年研究を続けてきたネロ教授（受け入れ教官）とは具体的なパラオの口承文化（詠唱・踊り・図像表象など）に係る共同研究の打ち合わせを重ねることができた。来年度以降も共同調査や分担著書の出版を通じて将来的な成果報告につなげる予定である。

2) また報告者は、受け入れ教官が定期的で開催している自主セミナー（おもに太平洋地域の人類学を専門とする研究者で、学生・教官を含む）において、平均して月 1 回のペースで発表する機会を得た。発表内容は、おもに報告者が 2015 年 3 月に提出した博士論文について、各章ごとにまとめて連続的に発表を実施した。セミナーでは、常に刺激的かつ発展的な意見交換が行われた。それらをふまえた今後の研究の展開として、詠唱に限らず広く口承文化を捉え直し、踊りや図像表象をも包括したパラオのナラティブ・アートの全体像とその変容を描くこと、更に、植民地以前から存在したアジア-西太平洋地域間の文化的交流に目を向け、より包括的かつ歴史的視座からパラオの文化的動態を捉えること、といった課題の検討に繋がった。また、これらの今後の研究における議論的展開を強固とするため、ネロ教授からは芸術人類学及び言語人類学分野に係る具体的な文献指導を受けた。これらの経験をふまえて、現在は 2 本

の論文を国際誌（The Contemporary Pacific, The Journal of Pacific History）への投稿するため準備をすすめている。

3) 太平洋地域を対象とする研究の世界的拠点のひとつであるニュージーランドの各大学には、太平洋地域に関連する資料・文献が豊富に著蔵されている。報告者は、オタゴ大学中央図書館（Central Library）及び同大学内の太平洋地域に係る専門図書館であるホーキン図書館（Hocken Library）を中心に文献調査を実施した。とくにホーキン図書館の図書館員からは多大なる協力を得る事が出来た。そのため、主に日本国内では入手することが困難である太平洋地域の詠唱・踊り及び口承文化に係る論文、資料、文献を収集することができた。しかし、植民地期以前の一次資料などは少なかったため、あらたにオークランド大学などでも文献調査を実施することで歴史的資料のさらなる分析につとめたい。

以上の成果に加えて、滞在中においては受け入れ教官であるネロ教授と教授のご家族が暮らす自宅に居候させていただいた。このことも、上記の報告内容と同様に今回の派遣における貴重な経験となった。同じ地域・分野を専門とする先輩研究者との共同生活は非常に刺激的なものであり、日々の会話から様々な知見を得る事が出来た。このように大変有意義な派遣となったことを報告すると共に、在外研究の機会を与えて下さった公益財団法人京都大学教育促進財団に深く感謝申し上げたい。

平成 27 年 10 月 9 日

公益財団法人 京都大学教育研究振興財団 御中

26 年度在外研究長期派遣に係る事業計画変更理由書

東南アジア研究所 連携研究員 紺屋あかり

（採択時の所属：アジア・アフリカ地域研究研究科 博士課程）

派遣期間短縮につきましてご報告させていただきます。

短縮理由は、受け入れ教官の研究都合に伴う長期出張を受けたものです。共同研究や学外での業務遂行のため、報告者の派遣前には予定されていなかった仕事が重なり、受け入れ教官であるカレン・ネロ教授につきましては、10月初旬よりオタゴ大学があるダニーデンから飛行機で1時間程度のクライストチャーチ及びミクロネシア地域への長期出張が決定しました。そのため、10月以降に報告者がオタゴ大学にてこれまでと同じような整った研究環境で研究を遂行することが困難な状況になりました。また、9月末次点においてはすでに本派遣の目的であった受け入れ教員と将来的な共同研究の打ち合わせ及び派遣先で研究のアウトプット、また国際誌への論文投稿に向けた指導などを十分に受けていたこともあり、受け入れ教員との協議の結果、派遣期間を短縮しての帰国という結論に至りました。そのため、以上のような派遣短縮に伴う研究成果への影響はありません。また、今後もニュージーランド海外研究機関で研究活動及びネロ教授との共同研究の展開など、将来性も十分に開かれたものであります。

急な変更であったためご報告が遅れたこと心よりお詫び申し上げます。

何卒宜しくお願い申し上げます。